2022年10月28日 読売大阪 朝刊 セ京都 13S版 27頁

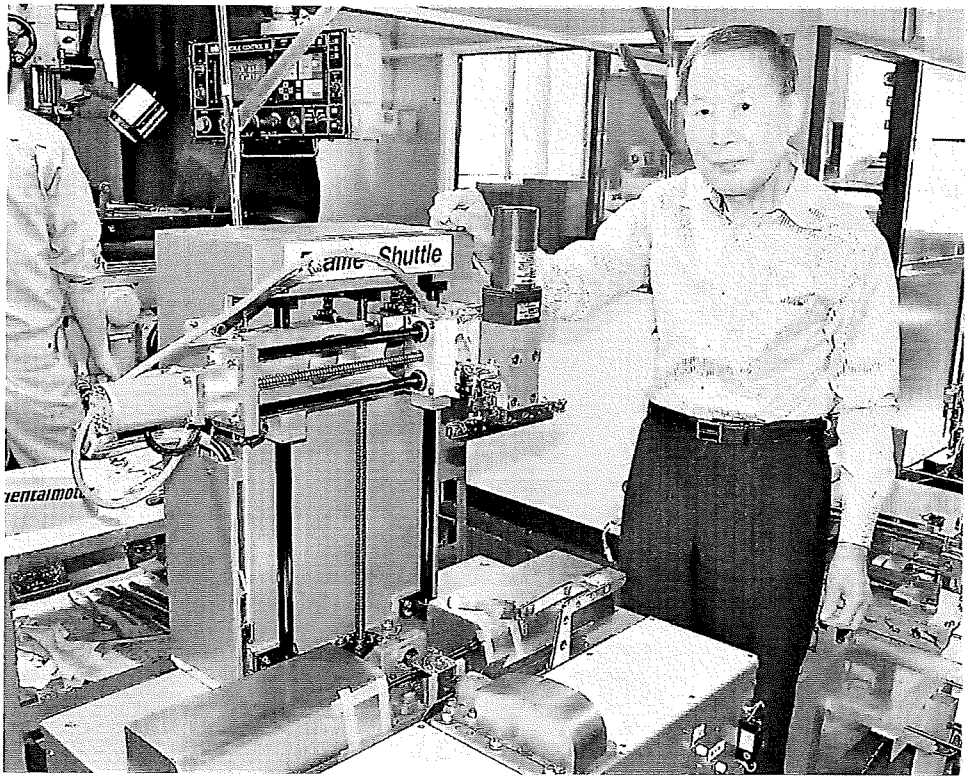
点字機器メーカーに光

本間一夫文化賞

南区の鉄工所 小林社長「需要ある限り」

視覚障害者の文化や福祉の向上に貢献した個人・団体に贈る「本間一夫文化賞」の第19回受賞者に、南区の産業機械メーカー「小林鉄工所」と社長の小林博紀さん(85)が選ばれた。点字を打つための自動点字製版機の国内唯一のメーカーで、受賞について「光栄なことです。これからも障害のある方のため続けていきたい」と語った。（道念祐二）

本間一夫文化賞　日本点字図書館（東京）を1940年に創立した本間一夫氏を記念し、読売光と愛の事業団などの協力で、2004年に設けられた。



国内唯一の自動点字製版機を手がけている小林さん（南区で）

同社は小林さんの父が1933年に創業。戦後の46年からは、点字関係機器の開発・製造も手がけてきた。小林さんが大学を卒業した61年の12月に父が亡くなったが、学生時代から仕事を手伝っていた小林さんは将来は継ぐつもりだったため、比較的スムーズに事業を受け継ぐことができた。

手動・足踏み式だった点字製版機の電動化に取り組み、84年に自動点字製版機を完成させた。パソコンから製版機に点字データを送ると、二つ折りにした亜鉛板の表裏に点字が自動で打刻され、印刷用原版が出来る。この原版の間に紙を挟み、ローラーに通してプレスすることで、瞬時に紙の両面に点字を打ち出せる。

教科書や選挙公報、レストランのメニューなど多くの点字媒体が、製版機で作った原版から印刷されている。納入先は特別支援学校や点字図書館、福祉作業所など全国にあり、部品の交換や修理のため、3年ほど前までは各地に足を運んでいた。「簡単な修理は利用者側でも可能だが、直接声を聞いて、どんな機械が必要か情報収集してきた」と振り返る。

2006年には、使用済みの点字用紙をローラーで潰し、紙を再利用する機械を開発した。導入した福祉施設は、これまで廃棄していた点字用紙をリサイクルし、封筒や一筆箋を作って販売している。このほか、点字名刺印刷機も手がけた。

同業者は08年に製造をやめており、国内唯一のメーカーになった。小林さんは「需要がある限り続ける。メーカーとしての責任がある」と力を込めた。